

第30回経済レポート イスラム原理主義

目次

1. 長嶋茂雄と天才たち	P 1
2. マルクス・レーニン主義	P 3
3. イスラムの世界	P 5
4. マホメットの教え	P 8
5. シーア派とスンニー派	P 9
6. イスラム通史	P 12
7. イスラム原理主義	P 16

1. 長嶋茂雄と天才たち

およそ社会人として仕事を行っていると、人には能力の差が歴然としてあり、神は決して人を平等に創ったのではないと認めざるを得ないことがある。出来る人は何でもできる。出来ない人は事実として何をやらしても出来ないではないか。私は絶えて人種差別主義者ではないが、人の能力差の歴然たる存在に目を背けるものではない。

このことはスポーツや受験といった能力差が客観的に測定可能な分野では、当然のこととして広く受け入れられている。事実として100メートルを10秒を切って走れる人間がこの地球上に存在している。これに対して普通の人はおそらく100メートルを走るのに17秒も18秒もかかるのであり、私の場合は20秒でも自信がない。走りきる前に倒れるかもしれない。この事例での能力差はなんと70%、80%そして100%、無限大という驚異的な数値となる。100メートルを9秒台で走る人はオリンピックに出て金メダルを取るであろうが、このような人は何も走ることに能力があるのではなく、もともと運動能力が高いためどんなスポーツをやらしても抜きん出ているのである。

受験の世界でも同様である。出来る生徒は数学だけではなく、英語も国語も出来るではないか。これらの生徒は記憶力・論理思考能力・言語能力・判断力といった頭脳の基礎活動能力そのものが優れている。そこで博愛平等主義者が登場し、人は皆平等であり努力すれば誰でも優れた業績を上げることが出来ると主張する。では、あなた自身が努力なるものをして100メートルを10秒を切って走って見たらどうか？

我々は皆学生時代に不毛と思えるような英単語や漢字、はたまた歴史上の人物名や年号、あるいは分子記号の暗記に苦勞した経験を持つ。しかし、世の中には暗記というものに苦勞することがないという人もいる。非常に稀な確率ではあるが、写真映像的記憶力

(Photographic Memory) を持つ人がいるといわれており、その存在は心理学的実験により事実として確認されている。我々がなにごとかを暗記する場合には、暗記する事項を何度も紙に書いてみたり、語呂あわせで覚えたりしなくてはならず、まことに手間のかかること甚だしい。写真映像的記憶力を持つ人はこのような暗記にかかる努力などというものとは無縁である。なぜなら、暗記しようとする項目が写真映像としてそのまま記憶されるため、記憶のファイルを開ければ暗記したい項目がそこにそのままの形であるからである。このような人は一枚の紙に書かれた数十行の文章を読み、それをそのまま即座に記憶することが出来る。そしてその文章を1行目から最終行にかけて暗唱するだけでなく、最終行から第1行目にかけて逆に暗唱することもできるという。その人にとってみれば、記憶にある文章は写真映像として脳のファイルの中にあるのであるから、その写真映像を最初から暗唱しても最後から復唱しても同じことなのである。

このような写真映像的記憶能力をもつ人と記憶力で勝負してもかなうわけではない。そこで写真映像的記憶力を持つ人は天才であり、従ってめったにいないものではないと考えたいのであるが、事実は必ずしも我々の期待通りではない。統計によればこのような天才は1万人に1人の割合でいるという。すなわち、日本には1万3千人の天才がいるのである。このことは自分と同年齢の日本人の中に約200人弱の天才がいることを意味する。日本の学校の学科試験では記憶力が高いことが高得点を得るための絶対的必要条件であるため、学生時代の全国統一試験か何かで各都道府県の主席をとるような生徒が写真的記憶能力をもつ天才である可能性が高い。つまり、各都道府県の主席と次席の二人と首都圏はトップ100に入るような生徒を足し合わせると、おおむね同年代の天才200人になる。結構な数の天才がいるのである。

優れた記憶力や運動能力はまことにうらやましく、これらの天才からその極意を教授いただきたいと思いがちであるが、やめた方がいい。彼らには目にも留まらぬ速さで走ってみたり、長い文章を瞬時に暗記したりすることはいとたやすいことなのであり、反対に自分には簡単に出来るこれらのことがなぜほかの人が出来ないのか、さっぱりわからないのである。我々とすれば努力が彼らの驚異的な能力の源泉であると期待したいところであるが、事実は違うのではないか。彼らは天才ではあるが、天才は世の中には掃いて捨てるほどの数がいるのであるから、その天才たちの中でさらに努力したもののみが金メダルやノーベル賞の栄冠に輝くのである。彼らは努力もするがその前に天才なのである。そこで天才である彼らに、どうすればあなたのような能力が発揮できるようになるのかと聞いてみても、彼らには説明することは出来ない。

戦後日本の職業野球史において長嶋茂雄氏が天才プレーヤーであったことは異論の余地がないが、だからといって長嶋茂雄氏にその打撃の極意を聞いても意味はない。このことは

長嶋茂雄氏が現役時代の雑誌で読んだのであるが、長島氏は打撃の極意は、「打者に向かってビュンと来る球をグッと踏み込んでガッと打つのだ」と言っていた。打撃の極意が分かったであろうか？このような質問は、天才になぜあなたは天才なのかと聞いているようなものである。答えは簡単である。生まれつきである。

私は長い間、なぜ博愛平等主義者が歴然として存在する人間の能力差を無視し、およそありえない虚構的幻想を振りかざしながら他人に対して詐欺的叱咤激励を行なうのか（君も頑張れば出来るなどと嘘を言う）、長年疑問に思ってきたところであるが、第23回経済レポート（トルストイと田中角栄）においてトルストイの幸福の一般原則を書いてみて思い当たる節がある。彼らは人の幸福の定義を教条的に誤解しているのではないか。

神は人それぞれに異なった能力を与え、能力の高いものは押しなべて全ての分野において能力が高いという傾向を有する。我々はこの事実の前に神の不条理を糾弾する。不平等ではないか。しかし、一方で我々は人の能力の高さとその幸福には何等の相関関係がないこともまた事実として知っている。能力の高いものだけが幸福を手に入れ能力のないものが幸福とは無縁であるとすれば、神はその不平等に対して謗りを免れないが、事實は能力と幸福には何等の相関関係もない。神は人の幸福について万人の平等の責に負うのであり、能力が高いか低いかは神の前ではその人の特性の一つに過ぎない。神の前では、身長が2メートルを超える特性を持つ人と写真映像的記憶能力をもつ人は、その特性の特異性において変わることはない。不平等を作り出しているのは人間なのであり、神が不平等にしたのではない。

2. マルクス・レーニン主義

読者は大貧民ゲームというトランプゲームをやったことがあるであろうか？私の幼いころの記憶が正しければ、このゲームの毎回の勝者は常にその回の敗者から最もよい手札をもらうことができる。そして勝者は敗者から入手した手札を加えたより良い手札によって、常に次のゲームを有利に運ぶことが出来る。勝者は自動的により強くなり、敗者は搾取により常により弱くなっていくのである。当然に勝者と敗者の差は大きく開く傾向があり、敗者が貧しい手札で逆転し勝者の地位に上り詰めるのは極めて困難である。なんともあざといゲームであるが、この遊びはゲームソフトにまでなって広く愛好されているという。

これは我々が実感している現実の社会そのものである。資本主義市場経済においては豊かなものはその富が更なる富の集積を生み、貧しいものはその貧しさゆえにさらに貧しくなっていく傾向を持つ。豊かなものはよりよい教育と医療を受けることが出来、その集積された富の力で常に有利な投資を行なうことができる。一方貧しいものは学校にも行けず病

気にでもなれば薬を買うこともできない。貧困において子供は唯一の財産なのであるから、貧困層は一般に多産でありかつ就学児童の若年労働を生み出しやすい。貧困層においては資本の蓄積が全く無いため、唯一の資本である自分の肉体を苛むように酷使して日々の糧を得るしか生きる道は残されていない。彼らは神の前に何の罪もなく貧しいのであり、その貧しさゆえにその子もまた貧しさを宿命として生きていかなければならない。

資本主義は地球の有限な資源の配分を市場の価格調整機能にゆだねている。市場には福祉であるとか博愛の精神は皆無であり、そこでの価格調整機能は単に需要と供給の強弱のみにより発揮される。市場では常に優れた機能に多くの需要が集まるので、能力の高いものは市場により高い評価を受け、結果として多くの資本を集積することが出来る。資本主義市場経済は弱肉強食の世界である。そこでの資本の集積は貧富の差を作り出し、貧困は更なる貧困を生み出すことになる。これが資本主義市場経済の凶器であり、市場は万能ではない。市場は最も低コストで資源の最適配分を達成する優れた仕組みであるが、一方で市場による価格調整機能は貧富の差と資本の集中を生み、そのことは人類総体としての福祉の向上を大きく阻害する。

貧富の拡大と資本の集中による資本主義市場経済の根源的な問題点を指摘して、その解決を示唆している思想は歴史上二つしかない。マルクス・レーニン主義とイスラム原理主義である。

資本主義市場経済の問題を無神論の立場から解消しようとするのがマルクス・レーニンによる社会主義革命論である。カール・マルクス（1818－1883）は、資本主義市場経済は資本の集中と独占を生み出し、独占資本は不可避免的に過剰生産と恐慌を引き起こすこと、また無制限な価格調整機能は労働者の大量の失業を生み出すことを論証した。マルクスはその著作「資本論」により、このような資本主義市場経済は歴史の中で必然的に破綻すること、すなわち成熟した資本主義はその特性そのものを原因として崩壊し、社会主義革命を経て共産主義に到ると予言した。歴史はマルクスの死後においてレーニンによる1917年のロシア革命、1929年の世界大恐慌によりマルクスの予言を実証している。

マルクスの思想が人類史に及ぼした影響の大きさは隔絶している。マルクス・レーニンによる社会主義革命は20世紀の世界を席捲し、多くの国で社会主義革命政権が樹立された。毛沢東（1893－1976）の中国、金日成（1912－1994）の北朝鮮、フィデル・カストロ（1926－現在）のキューバ、ホーチミン（1890－1969）のベトナムなど20世紀は多くの社会主義革命政権を生み出し、ほぼ全ての東欧諸国や少なからぬアフリカ諸国と中南米諸国、そして一部のアジア諸国が社会主義政権を樹立した。今となっては信じがたいことではあるが、1945年の第2次世界大戦の終結以降1991年

12月のソビエト連邦の崩壊までの約半世紀において、ソ連を中心とする社会主義陣営はアメリカを中心とする自由主義陣営とほぼ互角に対峙していたのである。

社会主義陣営と自由主義陣営の政治的対立は、経済的には社会主義計画経済と資本主義市場経済の経済体制の選択の違いである。ソビエトは人類史において初めて社会主義計画経済を実験した。結果として社会主義計画経済は1917年のロシア革命以来70年強の実験を経て失敗したことになる。なぜか。計画経済は市場原理を無視した資源の分配を行なうため、資本の最適配分に常に失敗するからである。国力を無視した軍備や国家威信をかけた宇宙開発に代表される採算性の取れない公共投資は計画経済の根源的特性である。計画経済は優れた官僚組織を得て10年20年といった中期的な成功を収めることはあるが、それが世紀を超えた長期的成功を収めることは論理的にありえない。このことは優れた独裁者が短期的な成功を収めることがあるけれども、長期的な成功はありえないことと同義である。

計画経済が長期的な成功を収め得ないのは、それがまた人の本能にそぐわないためでもある。共産主義は“能力に応じて働き、必要に応じて受け取る”思想である。これでは能力のある人間が馬鹿をみるだけのことであり、誰も懸命に働こうとはしない。社会主義計画経済国家で例外なく発生した非効率な官僚組織は、必要に応じて受け取るのであれば誰も能力に応じて働きはしないことを実証している。能力のあるものがインセンティブもなく懸命に働き、働きもしないが必要のあるものが多くを受け取る社会はユートピアかもしれないが、人間はそれほど立派な生き物ではない。かくしてマルクス・レーニン主義による社会主義計画経済は、現在のところ、金日成の世襲政権である朝鮮民主主義人民共和国一国を例外としてほぼ歴史上の使命を終了している。

3. イスラムの世界

マルクス・レーニン主義の破綻以降の現代史において、資本主義市場経済に対立する思想体系は唯一イスラム原理主義である。イスラム原理主義は資本主義市場経済の欠陥を有神論の立場から解決しようとする思想体系である。マスコミにおいてはイスラム原理主義がテロの代名詞として使われることが多いが、間違いである。イスラム原理主義は、その聖典であるコーランの教えを忠実に解釈し原始イスラム共同体の復活を願う宗教運動である。テロとは暴力破壊活動により政権の転覆を企てることを言うが、テロリストは無神論であるマルクス・レーニン主義者にも多くいたし、神を信じるキリスト教徒も歴史上多くのテロリストを輩出している。マフィアのコーサ・ノストラは敬虔なカソリック教徒である。たまたま歴史の現時点においてはイスラム原理主義者から比較的多くのテロリストが出ているだけのことであり、だからといってイスラム原理主義が暴力主義であることにはなら

ない。どのような思想も極端主義者を生むのであり、だからといってその思想を弾圧することは出来ない。全ての人に対して信教と思想の自由は保証されなければならない。

イスラム教は我々の想像を絶するほどの多くの信者を有している。世界の人口の約2割はイスラム教徒であるといえれば信じられるであろうか？イスラム教徒はキリスト教徒の1.9億人に次ぐ世界の宗教の大勢力であり、その数は日本人に多い仏教徒の3倍、また日本固有の宗教である神道の300倍もいる。人類の35%はキリスト教徒であり、イスラム教徒の18%、ヒンズー教徒の14%と仏教徒の6%がこれに続く。また土俗宗教と無宗教者は26%であり、日本人の実態はこの分類に近い。日本人は宗教的に分類すると世界の極小派に属している。まことに古い統計で恐縮であるが、以下に1996年度発行の「世界なんでもTOP10」（三省堂）による人類の宗教分布を示す。

世界の宗教人口

	宗教名	信者人数
1	キリスト教	1,900,174,000
2	イスラム教	1,033,453,000
3	ヒンズー教	764,000,000
4	仏教	338,621,000
5	シーク教	20,204,000
6	ユダヤ教	13,451,000
7	儒教	6,334,000
8	バハイイ教	5,835,000
9	ジャイナ教	3,987,000
10	神道	3,387,800
11	その他	1,410,553,200
	合計	5,500,000,000

※ その他は、無宗教を含む。
 ※ 世界の人口を55億人としてその他を逆算。

イスラム諸国会議機構（Organization of The Islamic Conference ; OIC）という国際機構があることを知っているであろうか？OIC はイスラム国家をメンバーとして構成され、国際連合に対して常任代表を有する国際機構である。サウジアラビアのジェッダに常設事務所を置いてイスラム開発銀行を附属機関として併設している。OIC への加盟国をイスラム国家と考えると、現在次の57カ国が世界のイスラム国家ということになる。外務省の発表によれば2005年9月現在日本が承認している国家の数は190カ国である。この190カ国に日本自身と日本が承認していない北朝鮮を加えた192カ国が今現在我々が認識可能な国家の数である。イスラムは人口で20%、国家の数で30%を占める世界の大部分である。

加盟国名	加盟国名	加盟国名
アゼルバイジャン	ギニア	トルコ
アフガニスタン	ギニアビサウ	ナイジェリア

アラブ首長国連邦	キルギスタン	ニジェール
アルジェリア	クウェート	パキスタン
アルバニア	コートジボワール	パレスチナ
イエメン	コモロ	バーレーン
イラク	サウジアラビア	バングラデシュ
イラン	シエラレオネ	ブルキナファソ
インドネシア	ジブチ	ブルネイ
ウガンダ	シリア	ベナン
ウズベキスタン	スーダン	マリ
エジプト	スリナム	マレーシア
オマーン	セネガル	モザンビーク
ガイアナ	ソマリア	モーリタニア
カザフスタン	タジキスタン	モルディブ
カタール	チャド	モロッコ
ガボン	チュニジア	ヨルダン
カメルーン	トーゴ	リビア
ガンビア	トルクメニスタン	レバノン

これだけの大勢力を占めるイスラム教というものに対して、日本人はあまりにも無知なのではないか。日本人はキリスト教徒でもないのにクリスマスを祝い、女性はバレンタイン・デイには訳のわからないチョコレートをオヤジにプレゼントしてみたりもする。結婚式をキリスト教会で挙げる人の数もまことに多い。(しかしながら葬式となると俄然仏教であり、はたまた新年になると突然愛国者となり、神道の神社に初詣に行くことになる。)日本人の圧倒的多数である非キリスト教徒はまことにキリスト教に対して寛容であり理解を示すのであるが、日本人でコーランにどのようなことが書いてあるのか知っている人はまずいないのではないかな。一体なぜイスラムはこれほどまでに多くの人間の支持を集めているのか？世界の2-3割を占めるイスラムは何を考え、何を主張しているのか？イスラムを理解しなければ、現在の世界の潮流を理解することは出来ない。

イスラムでは酒を飲むことを禁じている。飲酒は自制心を失わせ信仰心を麻痺させるからである。豚肉を食うことも禁じている。豚肉を生で食べると豚ヘルペスウィルスやトキソプラズマなどの寄生虫に感染し寄生虫病の発症する可能性があるため、イスラム教徒の広く居住する高温地域においては極めて危険だからである。イスラムは人に金を貸して金利をとってはならないと教える。金利は不労所得であり、資本の蓄積を生むからである。貧しい人に対しては施しをしなければならぬとも言う。社会福祉を社会倫理の中で自己完

結的に行うためである。これがイスラムであり、イスラム原理主義とはこのイスラムの教えを忠実に再現しようとするものである。まことにもっともな理にかなった教えではないか。そうでなければイスラムが全世界10億人の民の圧倒的な信仰を集めるはずがない。

4. マホメットの教え

イスラム教は世界の三大宗教の中では比較的新しい宗教であり、7世紀にマホメット（570－632）により開宗されている。マホメットは我々が宗教者として一般に描く清貧というイメージとはかなりかけ離れた人物で、宗教者であると同時に政治家でもあり軍人としても卓越した実績を残している。イスラム教はアラーの神に絶対帰依を求める一神教であり、キリスト教と同じくユダヤ教を成立母体としている。従ってキリスト教とイスラム教は兄弟宗教なのであり、イスラム教の経典であるコーランにおいても、キリスト教でおなじみの天地創造から最後の審判までの人類の運命史が共有されている。イスラム教においてはイエス・キリストもモーゼも神の言葉を伝える預言者なのであり、この中でマホメットは最大にして最後の預言者として位置づけられている。すなわち、イスラム教ではイエス・キリストよりマホメットのほうが偉いことが明示されていることになる。

マホメットは当時のイスラム社会では考えられない一神教を啓示し、偶像崇拝を否定すると共に、あろうことかアラーの前に人間に尊卑はないなどと言い出したため、当時のイスラム支配層から迫害を受けるが、反対に圧倒的多数のアラブ部族民の強烈な支持を得ることになった。ここからがマホメットのただ事ならざるところで、彼は宗教者でありながら自ら軍を組織し既存のイスラム支配社会との軍事闘争を開始するのである。マホメットは西暦622年に迫害を受けるメッカの地から70名強の信徒を連れてメディナに計画移住を行い、メディナの地からアラブの中心都市メッカへ再三にわたり戦を挑み、西暦630年にはついにメッカを征服している。このときマホメットは60歳であり、死の2年前のことである。

622年7月16日のメディナへの計画移住はイスラムでは聖遷と言われており、この日がイスラム暦での元年となっている。またマホメットがメディナで行なったイスラム共同体運営がイスラム教に於ける理想社会とされており、イスラム原理主義はこの原始イスラム共同体を現代の社会において実現することを目指している。マホメットには3男4女が生まれているが男子は全て早世し、末娘のファーティマがその後のイスラム教の正当な後継者とされている。どうでもいいことではあるがマホメットは10人を超える妻を持っていた。

イスラム教では六信五行といって次の6つの事項を信じ5つの勤行を行なわなくてはなら

ない。五行についてはジハード（聖戦）が加わって六行とされることもある。

六信

- (1) 全知全能の唯一の至高神アラー
- (2) 天使
- (3) 経典コーラン
- (4) 預言者マホメット
- (5) 最後の審判
- (6) アラーの定めた天命

五行

- (1) シャハーダ（信仰告白）

「私はアラーのほかに神はなくマホメットはその使われし人であることを証言します。」と唱える。

- (2) サラア（礼拝）

毎日5回一定の時刻にメッカに向かって礼拝を行なう。

- (3) サウム（断食）

ラマダーン（イスラム太陰暦第9月）の昼間に一切の飲食、喫煙、性行為などを絶つ。

- (4) ザカート（喜捨）

財産の一部をアラーにささげれば、残りの財産も清くなるという考えに基づき宗教的義務として所有物の一部を抛出する。ザカートの用途は困窮したムスリムの扶助に限定される。イスラム教においては現世の財産は悪魔が与えたものであり、来世の苦悩の源であるとする。

- (5) ハッジ（巡礼）

メッカのカーバ神殿及びメッカ北郊の聖地への巡礼。

5. シーア派とスンニー派

イスラム教の発祥の経緯とその教義の基本的な理解をえた。それでは現在のイラクの政治的混迷の根幹にあるといわれるイスラム教二大宗派であるスンニー派とシーア派の対立の原因はどこにあるのであろうか？マスコミ報道によれば、スンニー派もシーア派も共にイスラム教の宗派でありその教義に大きな違いはないという。ではなぜこれほどまでに激しい対立をするのか？血で血を洗うような死の抗争が連日イラクの地で行なわれている以上、両派には対話では解決不可能なほど鬱積した憎悪の累積があるはずであろう。

スンニー派とシーア派の対立の構造は、マホメットの死後におけるイスラムの正当性をめぐる争いにまで歴史を遡らなければ理解することが出来ない。マホメットがその多才な能

力によりイスラム教と原始イスラム共同体を確立したことは既に述べた。マホメットの死後（632年）イスラムの教義と共同体を引き継いだのは正統カリフといわれる4人のカリフである。ここにカリフとは初期イスラムの最高指導者の称号を言う。4人の正統カリフとその統治の年代は次のとおりである。

- (1) アブー・バクル（632－634年）
- (2) ウマル（634－644年）
- (3) ウスマーン（644－656年）
- (4) アリー（656－661年）

正統カリフはマホメットの死後イスラム共同体の合議により選出され、いわば正当にイスラムを継承した者達である。初代正統カリフのアブー・バクルはマホメットの親友であり、622年のメディナへの聖遷を共にしたイスラム教の創業者グループの最有力者である。この時代にアラビア半島のアラブの統一が達成されている。第2代正統カリフのウマルも聖遷を経験した創業者グループである。アラブ帝国とも言うべき中央集権国家を確立した。第3代正統カリフのウスマーンはアラブの名族ウマイヤ家の出身であり、マホメットの娘ルカイヤの婿である。経典コーランを完成させたが、ウマイヤ家の同族重用を行なったとして不満分子により暗殺された。第4代正統カリフのアリーはマホメットの従兄弟であり末娘ファーティマの娘婿でもある。アリーはその就任のいきさつから名族ウマイヤ家と対立した。ウマイヤ家は第3代カリフのウスマーンを暗殺したのはアリーであるとの疑いを持っており、ウマイヤ家の当時の実力者ムアーウイヤとアリーとの内戦が起きたのである。結局アリーもまた刺客により暗殺されることになる。

アリーの暗殺により30年4代にわたる正統カリフの時代は終焉する。アリーとの内戦に勝ったムアーウイヤは自らカリフを称し、ここにウマイヤ朝イスラム帝国が成立する。ウマイヤ朝はアラブによるイスラム王朝であり、西暦661年から750年までの90年間14代にわたりイスラム世界を統治した。ウマイヤ朝はアラブ民族発展の頂点を極めたが、当時のヨーロッパのビザンチン帝国の制度やヘレニズム文化が多分に取り入れられ、イスラム固有の峻烈な教義は退化することになる。統治形態としてはアラブ至上主義による武断政治である。ウマイヤ朝イスラムは西暦750年にアッバース朝イスラムに滅ぼされ、アッバース朝イスラムは750年から1258年までの500年あまりのイスラム社会を支配する。アッバース朝イスラムは1258年のモンゴル軍の襲撃により滅亡した。モンゴルによるイスラム支配は1299年のオスマン帝国の建国までの42年間である。オスマン帝国は1299年から1922年までの600年余りの期間においてイスラム社会を支配した。その後第1次世界大戦と第2次世界大戦を経て現代のイスラム国家が続々と成立することになる。なお、オスマン帝国をオスマン・トルコとして紹介している事例があるが事実誤認がある。オスマン朝はイスラムによる多民族国家だったのであり、トルコ人

による政権とはいえない。

ウマイヤ朝イスラムはテロによる革命政権である。ウマイヤ朝はイスラムの始祖たるマホメットとはなんらの血のつながりもなければ、イスラム共同体の合意も受けておらず教義の正当性があるわけでもない。一方ウマイヤ朝により暗殺されたアリーの血統の素晴らしさは輝くばかりではないか。アリーは始祖マホメットの従兄弟であるばかりか、教義の正当性を相続したといわれる末娘ファーティマの娘婿でもある。アリーにはマホメットの血が色濃く流れている。しかもアリーは最後の正統カリフなのであるから、アリーはマホメット亡き後のイスラムにおいて比類なく正統である。シーア派とはこのアリーとその子孫のみがイスラム共同体の指導者としての正当な後継者であるとする主張するイスラム教の宗派のことを言う。これに対してスンニー派はアリー以外のマホメットの血のつながらないカリフもまたイスラム共同体の指導者として認める宗派である。

このようなイスラムの正当性の解釈の違いからして、当然のことながら、スンニー派は比較的穏健であり妥協的である。イスラム社会はアラブ人・ペルシャ人・トルコ人・クルド人などを含む多民族国家なのであるから、穏健妥協的なスンニー派のほうが国家経営は安定する。従ってウマイヤ朝もアッバース朝もさらにはオスマン帝国もスンニー派である。一方のシーア派はアリー暗殺後もアリーとその子孫の正当性を主張し続けスンニー派に対抗するイスラムの宗派を形成したのであり、現在にまでその主張は揺るがない。シーア派は必然的に先鋭的であり純粋志向が強い。

現代においてもスンニー派はイスラム教の多数派であるが、ここに例外もある。イスラム国家のほとんどはスンニー派ではあるが、イランとイラクのイスラム2大国においてはシーア派のほうが国民の多数を占めているのである。しかもこの2国は現代の世界エネルギーの中核である原油の大産出国でもある。ここに現代史の不幸がある。

宗教とは、科学的には証明不可能な観念論の集大成なのであるから、必然的に観念の純粋性を尊ぶ。より純粋な観念論こそ、合理的には説明不可能な不条理に苦しむあまたの宗徒の苦しみに強い福音をもたらすからである。神の前に何等罪もなく不治の病や洗うがごとき赤貧あるいは冤罪に苦しむ多くの人を、証明可能な科学は救済することが出来ない。観念の純粋論において教義の純粋性と血の純潔性は強く相互作用を及ぼし、教義の純粋性が血の純潔を求め、血の純潔が教義の純粋性を担保する。教義なき日本の天皇制が1億を超える国民の圧倒的な支持を1千年を超えて集めてきているのも、万世一系とされる血の純潔が神道という教義のあいまいさを補完して余りあるからである。シーア派はイスラムの少数派ではあるが、その教義はまことに強いと言わなければならない。

シーア派やイスラム原理主義はマホメットの教義に忠実であり、スンニー派のような世俗勢力との妥協を許さない。もとよりマホメットは五行において喜捨を教え、現世の財産は悪魔が与えたものであり来世の苦悩の源であるとする。この教えに従えば、資本主義市場経済による富の集中という害悪が生じることはないのであるから、シーア派やイスラム原理主義の主張によれば、イスラム社会の貧困と困窮は全てスンニー派の妥協主義が資本主義市場経済の害悪をもたらした結果ということになる。イスラムの民がマホメットの教えによる“神の前に人は平等であるはず”との救済を求める力は、それが日々の困窮や病死という絶望的な現実を支えられているだけに、まことに強いものであると考えなければならない。シーア派は、そのイスラムの民の怒りの矛先を、資本主義市場経済による西側先進国とその傀儡政権であるイスラエル、並びにそれら勢力と妥協してマホメットの教えとイスラムの民に背信しながら現世の利益を貪るスンニー派多数勢力に向けている。まことにシーア派とスンニー派の対話は成り立ちがたい。

6. イスラム通史

イスラム教とイスラム共同体の基礎理解を得た上でイスラム通史を見てみれば、イスラム世界の事情が有機的に分かるかと思ひイスラム通史を探してみたのであるが、残念ながら私の期待するものを発見することは出来なかった。私はただ単にイスラムの世界から見た歴史年表が欲しかっただけなのであるが、ほとんどの年表は西欧の事象を中心に編纂されているため、イスラムの立場から見た世界史年表なるものがどこにもないのである。仕方がないので自分で作成した。以下に本邦初公開のイスラム年表を示す。

近代イスラム通史

西暦	史実	摘要
570	マホメットの生誕	
622	マホメットのメディナ聖遷	
630	マホメットによるメッカ征服	
632	初代正統カリフ	マホメットの死亡とアブー・バクルのカリフ就任
634	第2代正統カリフ	ウマル
644	第3代正統カリフ	ウスマーン
656	第4代正統カリフ	アリー
661	ウマイヤ朝成立	アリーの暗殺とアーウイヤによるウマイヤ朝
750	アッバース朝成立	ウマイヤ朝の滅亡アッバース朝の創設
1096	第1回十字軍	十字軍による聖地エルサレム奪回
1147	第2回十字軍	十字軍ダマスカスで敗退

1189	第3回十字軍	イスラムの英雄サラディン、エルサレム奪還
1202	第4回十字軍	十字軍コンスタンチノーブル征服
1218	第5回十字軍	十字軍エジプト攻略失敗
1228	第6回十字軍	十字軍エルサレムの統治権入手
1248	第7回十字軍	イスラムによるエルサレム奪還
1258	アッバース朝滅亡	モンゴル軍総督フラグによるイスラム征服
1270	第8回十字軍	十字軍チェニス遠征失敗
1299	オスマン帝国の成立	オスマン1世王位就任
1453	ビザンチン帝国滅亡	オスマン帝国によるコンスタンチノーブル攻略
1512	オスマン帝国イスラム盟主化	第9代セリム1世イスラム・スンニー派盟主化
1529	第一次ウィーン包囲	スレイマン1世ハプスブルグ家の首都包囲
1571	レパントの海戦	オスマン艦隊スペインの連合艦隊に敗北
1683	第二次ウィーン包囲	第二次ウィーン包囲失敗
1699	カルロヴィッツ条約	オスマン帝国東欧の覇権を失う
1718	パッサロヴィッツ条約	オスマン帝国セルビアのベオグラードを失う
1774	キュチュク・カイナルジ条約	黒海北岸をロシアに割譲
1798	ナポレオンのエジプト遠征	ナポレオン・ボナパルトのエジプト遠征
1828	トルコマンチャーイ条約	イラン・ロシア国境の画定
1829	ギリシャ独立	オスマン帝国よりの独立
1838	第1次アフガン戦争	イギリスのアフガニスタン侵攻
1830	エジプト自立	オスマン帝国よりの自立
1853	クリミア戦争	オスマン帝国対ロシア戦争きわどく勝利
1878	サン・ステファノ条約	オスマン帝国対ロシア戦争完敗
1878	第2次アフガン戦争	イギリスによるアフガニスタンの外交権獲得
1908	青年トルコ党革命	スルタン君主制から立憲制の確立
1914	第1次世界大戦勃発	オスマン帝国同盟国側で参戦、対協商国
1915	フサイン・マクマホン協定	対オスマン戦争後のアラブ国家の建設
1916	サイクス・ピコ秘密協定	英・仏・露によるオスマン帝国の分割協定
1917	バルフォア宣言	ユダヤ国家建設とロスチャイルドの協力
1918	第1次世界大戦終結	同盟国が協商国側に敗退
1919	第3次アフガン戦争	アフガニスタンによる外交権奪取
1922	トルコ革命	オスマン帝国の滅亡
1922	エジプトの独立	王政による独立
1923	トルコ共和国成立	共和制トルコの建国

1925	イランの独立	パーレビ朝イラン王国の独立
1928	トランス・ヨルダン建国	ヨルダン川東岸のアラブ国家
1932	イラク王国の独立	ハーシム家によるイラク王国独立
1932	サウジアラビア王国の建国	イブン・サウードによる建国
1939	第2次世界大戦勃発	連合国対枢軸国
1941	シリアの独立	実質的な特権層支配、名目的共和制
1941	レバノンの独立	実質的な特権層支配、名目的共和制
1945	第2次世界大戦終結	連合国の勝利
1947	パレスチナ分割案	国連によるパレスチナ分割案
1947	東西パキスタンの独立	イスラムによるインドからの分離独立
1947	第1次インド・パキスタン戦争	カシミール帰属問題
1948	第1次中東戦争	イスラエルの建国、イスラエルの圧勝
1952	エジプト革命	ナセルによる革命政権
1956	第2次中東戦争	エジプトによるスエズ運河の国有化
1964	PLO 創設	アラファトによる人民解放戦線
1965	第2次インド・パキスタン戦争	カシミール帰属問題
1967	第3次中東戦争	6日戦争
1971	第3次インド・パキスタン戦争	カシミール帰属問題
1971	バングラデシュの独立	東パキスタンの独立
1973	第4次中東戦争	第1次石油危機
1978	キャンプデービッド合意	エジプトのアラブ連盟からの脱退
1979	イラン革命	ホメイニ師によるシーア派イスラム共和国
1980	イラン・イラク戦争の勃発	シャトル・アラブ川の領有とクルド人問題
1988	イラン・イラク戦争の終結	イスラム革命とサダム・フセインの対立
1991	湾岸戦争	イラクのクウェート侵攻とアメリカ軍事介入
1993	パレスチナ自治の開始	イスラエルとPLO 間の暫定自治政府合意
2001	世界同時多発テロ	9. 11ニューヨーク貿易センタービル爆破
2001	アフガニスタン侵攻	アメリカのアフガニスタン侵攻
2003	イラク軍事侵攻	アメリカのイラク軍事侵攻

イスラム史が世界の他のいずれの通史とも決定的に違っているのは、イスラム国家の歴史は常にイスラム教と共に動いていることである。イスラムにおいては政治と宗教は一心同体であり、国家の行動原理はイスラム教の原理に強く支配されている。全てのイスラム国家は宗教国家であり、イスラム国家は、宗教が国家の行動原理の中で大きな割合を占めることの少ない他のいずれの国ともその行動原理において決定的に違う。

570年のマホメットの誕生から正統カリフ時代までの80年は原始イスラム共同体時代である。ここに今日のイスラム原理主義の原点があることは既に述べた。661年のウマイヤ朝の成立から、アッバース朝の時代を経て、1922年のオスマン帝国の滅亡までは、13世紀にわたるイスラム王朝の黄金時代である。豪華絢爛たるアラビアン・ナイトの世界が実在していたのである。この間、40年ほどのモンゴルによる一時的支配はあったものの、イスラム教スンニー派を奉じる3朝のイスラム多民族王朝国家がほぼ一貫して中近東・北アフリカ・東ヨーロッパの広大な地域を支配していたのである。

イスラムの文化は優れて融合文化である。イスラム帝国は、多民族国家を背景としたイスラム教とアラビア語の基調の下で、ギリシャ・ペルシャ・インド・アラブの文化が融合した国際的な文化を創り出した。通史を見ると少なくともイスラムは18世紀中ごろまでは軍事・経済・文化のいずれにおいても西欧に劣ることはない。文明が停滞した中世のヨーロッパではむしろイスラム文化が翻訳によりヨーロッパにもたらされ、その後のルネッサンス（14－16世紀）の開花に多くなる影響を与えたとする説もある。西暦476年のローマ帝国の滅亡以降1529年のオスマン帝国によるウィーン包囲までの西半球史においては、イスラム帝国こそ西欧史に対して優位である。

7. イスラム原理主義

通史を見ると18世紀後半以降のイスラムの退潮は目を覆うばかりである。オスマン帝国は黒海北岸、東欧、ギリシャ、エジプトといった伝統的なイスラムの地を次々と失っていき、結局1922年に滅亡する。かつては西欧ハプスブルグ帝国の首都ウィーンを包囲するまでに権勢を誇り繁栄したイスラムの栄光が、なぜかくも無残に地に落ちてしまったのか？史実は明解である。18世紀後半よりイギリスを中心に西欧で勃発した産業革命をイスラムは消化できなかったからである。18世紀半ばの西欧における産業革命の進行と中近東におけるイスラムの没落はその時期を一にしている。イスラムは産業革命後の西欧に対して産業の生産性において決定的に立ち遅れ、その結果経済的地盤沈下を起し、これが軍事及び文化の停滞につながったのである。

1914年の第1次世界大戦から1945年の第2次世界大戦の終結までの32年間において、イスラム世界は英・独・仏・露・米といった列強帝国主義になすがままに蹂躪されている。ひどいのは1915年のフサイン・マクマホン協定、1916年のサイクス・ピコ秘密協定、1917年のバルフォア宣言というイギリスの三枚舌外交である。イギリスはアラブには戦争協力と引き換えに戦後のアラブ国家の建設を約し、ユダヤにはロスチャイルドの戦時資金協力と引き換えに同じく戦後のユダヤ国家の建設を約しながら、陰では

フランス・ロシアとオスマン帝国のイスラムの地を分割する協定を結んでいたのである。イギリスの手はイスラムに対して血の色で真っ赤に汚れている。

産業革命とは18世紀から19世紀にかけて西欧で起きた工場制機械工業の導入による産業の変革とそれに伴う社会変革を言う。産業革命は18世紀の蒸気機関や紡績といった軽工業中心の第一次産業革命と、19世紀の石油とモーターを動力源とする重工業中心の第二次産業革命に分けて考えることもできる。産業革命は18世紀にイギリスで勃興するやたちどころにドイツ・フランス・アメリカに伝播し、世紀を超えることなくほぼ西欧全域に波及することとなった。産業革命の影響は遙か極東の日本にまで及び太平の鎖国政策をとっていた徳川幕藩体制を一撃の下に粉碎し、明治維新（1868年）を経て大日本帝国という産業革命指向型の革命政権を樹立させている。

これだけの波及力のある産業革命を18世紀の先進国であったイスラムが消化できなかったのはまことに不思議な気がする。産業革命は18世紀にキリスト教プロテスタント国であるイギリスで発生し、ドイツ・アメリカというプロテスタント諸国に最も早く伝播している。19世紀になるとカソリック諸国にも産業革命は押し寄せ、20世紀においてはマルクス・レーニン主義による共産主義ソビエトもさらには仏教国日本でさえか産業革命を十分に消化しているのである。イスラムの教えの中に何か産業革命を受け入れられない決定的な要因があると考えられるべきではないか？

産業革命がプロテスタント国であるイギリスにおいて自発的に発生したことを偶然と捉えるべきではない。産業革命を遡ること2世紀前の16世紀にキリスト教世界に宗教改革の大きな波が押し寄せたことが知られている。ドイツのマルティン・ルター（1483－1546）やフランスのジャン・カルヴァン（1509－1564）が輩出して宗教改革を訴え、現在のキリスト教プロテスタント教会の原型が出来上がった。

話は少しずれるが、宗教改革の始祖マルティン・ルターの主張は“人間は制度や行いにより神の前で義とされるのではなく、信仰のみにより義とされること”および“聖書に根拠のない秘跡や慣習を否定し聖書がキリスト教の唯一の源泉であること”を激しく主張した。当時のカソリックキリスト教は贖宥状（免罪符のこと。ただし免罪符という翻訳は間違い。）を盛んに販売して腐敗と墮落を極めていたのである。“贖宥状を購入してコインが箱にチャリンと音を立てて入ると靈魂が天国へ飛び上がる”という有様であったという。どうでもいいことかもしれないが、ルターはカソリックにおいて聖職者が独身を保たなければならないことも意味がないとして退けている。従って現在でもプロテスタントにおいては聖職者の妻帯は何等問題とはされない。ルター自身1525年にカタリーナ・フォン・ボラという25歳の修道女と結婚している。このときルターは42歳であった。三男三女をもう

けている。

プロテスタントのもう一人の巨人ジャン・カルヴァンは“職業は神から与えられたものであり、得られた富は蓄積しても良い”と主張した。従ってプロテスタントにおいては金利もまた神の前で認められる。プロテスタントの教義においては、現世における成功は神の加護の証であるということになる。プロテスタントでは、与えられた仕事を天職と考えそれに打ち込むことで神に救われるのである。すなわちプロテスタントにおいては、勤勉、勤労、創意工夫、資本の蓄積、金融といった近代資本主義の発生に必要な基礎概念の全てを教義が認めている。産業革命がプロテスタント国で発生し近代資本主義が勃興したのは当たり前のことであろう。宗教改革が産業革命をもたらした資本主義市場経済をはぐくんだのである。

プロテスタントの出現により西欧キリスト教世界はローマ・カソリック教会とプロテスタント教会に二分されることとなった。プロテスタントにより激しく攻撃されたカソリックも、プロテスタントという健全なる野党の出現を得て自己改革を余儀なくされた。現在ではカソリックにおいても金利を認めている。現代のローマ・カソリックは資本主義市場経済と共存可能なのである。これに対してイスラム原理主義はどうか？

既に第4節の五行において解説したように、イスラムではラマダーンがある。ラマダーンの一月の昼間において一切の飲食が行なえないことは、その間の労働の生産性を著しく低下させる。イスラムは毎日5回決められた時間にメッカの方角に向かい礼拝を行なわなければならない。その間全ての職務は停止する。イスラム教においては現世の財産は悪魔が与えたものであり、来世の苦悩の源であるとされる。従って資本の蓄積はありえない。金利もない。これでは資本主義市場経済との共存は不可能である。

イスラム教はその歴史においてイスラムの正統性という観念論にのみそのエネルギーを費やし、教義の近代化にまことに遅れをとっている。どのような宗教もそれが人の救済を目的とするものである以上、人の営みと教義は乖離すべきではないであろう。人の営みは歴史と共に変遷していくのであるから、教義もまた歴史の中で変遷していくべきであり、そのために宗教者の存在意義があるのではないか？マホメットが西暦622年から632年にかけてアラビアのメディナの地で行なったイスラム共同体の社会は理想とすべきものかもしれないが、それを時空を超えた現代の世界でそのままの形で再現することは非現実的ではないか。

世界は、しかしながら、このような資本主義市場経済と並存不可能なイスラム原理主義が全世界10億人のイスラムの民に強く支持を広げていることを理解しなければならない。

既に論述を重ねてきたように、イスラム原理主義の教義はまことに人間愛にあふれたものであり、イスラムの教義に従う人の生活は常に神の存在を身近に感じる穏やかなものであろう。イスラム原理主義の教義の中に暴力破壊主義などない。イスラム原理主義がたとえ資本主義市場経済と並存不可能であろうと、経済体制の選択権はイスラムの民にあり、西側先進国がイスラムの経済体制の選択につき介入することは不当である。また、イスラムの教義は近代合理主義に慣れ親しんだ我々の生活様式とはそぐわないものが多いが、このことをもってイスラム原理主義を攻撃することも不当である。どのような思想も宗教も尊重されなければならない。イスラム原理主義は過激思想ではないが、仮に過激思想であるとしてもその信教は自由である。イスラムの民がどのような神を信じどのような教義を奉じようが、そのために他国の民を傷つけることがない限り、他国はイスラムの信教を阻害すべきではない。

アメリカは世界同時多発テロの報復であるとして、アフガニスタンを攻め、イラクに軍事侵攻を行なった。テロは憎むべきものであるが、民族国家としてのアフガニスタンもイラクもただの一人のアメリカ市民を殺害していない。憎むべきはテロリストではあっても、イスラム国家でもなければイスラム原理主義でもない。

イスラム原理主義は事実として極貧の民に強く支持されている。世界はこのことに思いを馳せなければならない。資本主義市場経済が生み出した豊かさの裏側には、絶望的な貧困に苦しむ計り知れない数の極貧の民がいるのであり、その悲惨な現実にはマスコミでも報道されている。彼らにとっては多くの場合国家自身が加害者なのであり、現世の全ての組織から見放された彼らの救済を行なっているのは、唯一イスラム原理主義なのである。そして彼らの中の絶望的な過激分子が自爆テロに走っている。

さてアメリカはテロとの戦いと名目でイラクへの軍事駐留を続けている。米軍がイラクに駐留を続けると1ヶ月に50億ドルの金がかかる。アメリカがイラクを憎んでいくらロケット弾や戦車でイラクの民を脅してみても自爆テロはなくなる。兵器は人の命を物理的に奪うことは出来るが、人の心を奪うことはできないからである。アメリカは大義なきイラクの軍事駐留を直ちに停止して軍を引き上げたほうがいい。軍事駐留は金をどぶに捨てるどころか、毎月50億ドルの金をかけて自爆テロの原因を反復連鎖的に作り出しているようなものである。

テロとの戦いを軍が行なうことは意味がない。米軍がイラクの民家を回ってテロの容疑者を射殺する。父を殺されたイラクの民に貧困の憎しみに加えて復讐の恨みが加わる。そこでまた若きテロリストが生まれる。このもぐらたたきを続ける限り、自分の国で闘うイラクの民に米軍が勝利することなどありえない。民族解放戦線にはどのような近代軍も勝つ

ことは出来ない。アメリカはそのことをベトナムで学ばなかったのか？テロの根絶はテロの原因をなくすことなのであるから、アメリカが本当にテロを根絶したいのであれば、月々50億ドルの金で水及びパンと米、良質の蛋白源と医薬品並びに毛布を買え。これらの物資を全世界のイスラムの難民並びに困窮層に配送せよ。この金で学校と病院を作り井戸を掘れ。またイスラムの民が経済的な自立が行なえるように、彼らの輸出品に対する関税を撤廃せよ。また、自国の同業者に対する補助金政策をやめよ。2006年の年頭に当り、テロとの戦いは兵器ではなく愛でしか行なえないということを、いい加減アメリカは学ばなければならないと思うものである。

2005年1月1日 細野祐二